



理科系の論文作法†

高木 隆司 著

評者は、今年1月より本会誌の編集委員に加えていただいた。編集委員会の席上、「投稿論文の中で、内容は良いのに日本語に問題のあるものが少なくない。残念だ。」という意見があり、論文の書き方に関する本を書評として紹介させていただくこととした。本欄で紹介する「理科系の論文作法」の著者高木隆司氏は流体力学が専門で、約30年間「形の科学会」という学際的な研究会を主導してこられた。形をキーワードに、物理学者が核になって、数学、情報工学、医学生物学、化学、社会学など、多様な分野が交り合う学会である。高木氏には、本会誌の今月号から「形の科学」の連載を開始していただいている。

本書は丸善ライブラリーの新書として1997年に出版されたものが初出である。私事で恐縮だが、評者はその当時、東京農工大学工学系研究科の大学院生として、「生体の形を科学する」べく、高木教授の指導を受けていた。10数年間臨床医学研究を行なった後に入学したので、論文執筆や研究発表に関してはそこそこの経験を積んでいた。英語論文の書き方に関しては一所懸命勉強してきたが、日本語論文の書き方などわざわざ教わることもないと、内心想っていた。しかし、本書を読んで、目からウロコが何十枚もはがれ落ちた。たとえば接続詞の使い方、句読点の使い方、段落の分け方、などなど、それまで全く無自覚だったことに気づかされた。図式・図解に用いる矢印の使いわけにも感嘆させられた。それまでの人生で一度も教わることのなかったことばかりだった。論理的でわかりやすい文章を書く技術は、文系理系を問わず、どの職域、どの社会でも必要とされるものである。また、日本語だけでなく、どの言語にも共通する技術である。大学のカリキュラムにこのような文章教育が導入されれば、前掲の編集委員の嘆きもなくなるように思われる。

2003年に装いを新たに出版された本書には、随所に

練習問題が挿入されており、自己学習を促すような工夫が加えられている。また、パソコンやインターネットの活用方法が追加されている。2011年現在、多くの学術誌がオンラインに移行しつつあり、本書の予測通りの状況になっている。高木氏は、査読制度も含めて、科学研究の発表・評価の方法自体が、オンライン化により大きく変わるだろうと予想されているが、現時点ではまだそこまでは至っていない。論文作法そのものを変えるような変化は起こっていないので、当面は、本書の再改訂の必要はなさそうである。

本書もそうであるが、高木氏のご著書はどれもすっきりと整理されていて、筋道が追いやすい。本書にあるように「名文ではないかもしれないが明文」で、読んでいて脳内が爽快になる。脳が体操をしたような感じである。読むのが楽しくなるような論文の書き手になってくれ、という著書の願いが本書から伝わってくる。評者はというと、いまだ修行半ばで、この書評を書くにも四苦八苦している。師の教えのリアルサンプルをお示しできないのは、何とも残念なことである。

理科系の論文作成に関する著書をアマゾンで検索したところ、木下是雄氏「理科系の作文技術」(中公新書、1981年)と、杉原厚吉氏「どう書くか一理科系の論文作法」(共立出版、2001年)、が見つかった。木下氏のご専門は物性物理学、杉原氏は計算幾何学である。木下氏の「理科系の作文技術」は、出版後30年を経てもなお多くの読者に読まれている。杉原氏は錯視研究の第一人者で、軽快な筆致と挿絵がおもしろい。お二人の年齢と専門分野を足して2で割ったくらいが高木氏で、本書の内容も、お二人の御著書の間中に位置するように思われる。お好みに応じてお選びいただければ、幸いである。

株式会社 JSOL 学術顧問 北岡 裕子

† 丸善出版(2003年発行、2007年第4刷発行)
1,785円(本体1,700円+税)